

# Eureka VIII

六年制通信 No.8 令和2年6月26日(金)号

## 確証バイアス

ある大学の先生の講演を聴いたときのことです。前にも一度書いたかもしれませんが、本当に心から驚いたことがありました。講演の冒頭、つまり第一印象が最悪でした。確かご自分の古典講読のゼミだったように記憶していますが、講義中に自分から投げかけられた質問に対し学生たちは即座にネットで調べて答えてくれる、そう言われたのです。大学の先生が自慢げにそう言ったのです。驚きました。そんな低レベルな講義をするゼミがあることにも驚きましたが、それを自慢げに話す先生がいることに驚愕したのです。私には学問を貶めているとしか思えませんでした。いや、大学だからネットで勉強してはいけないと言っているのではありませんよ。小学校ならもっと悪いでしょう。ネットの情報は無責任ですから、勉強の基礎に使ってはいけません。皆さんも「孫引き」という言葉は聞いたことがあるでしょう。我が『新明解国語辞典』によれば「他の本に引用してある文句を、無批判にそのまま引用すること（誤りの元になる）」ですが、要するに聞いたことや読んだことを「確かめないで」そのまま自分が言ったり書いたりすることをそう言います。ネットには情報が溢れていると言いますが、正しくはネットには孫引き情報が溢れているのです。端的に言えば、いい加減な情報や誤った情報で満ちています。ブリタニカ辞典に載っていたというのとネットに書いてあったということを同列に扱ってはいけません。少なくとも大学では、必ず原典に当たって確かめることなしに勉強してはいけない、まずそのことをイロハのイとして教えなくてはなりません。その原典は往々にして外国語である場合があるわけで、それを翻訳で読んで済ますわけにもいかず、学生は苦勞して外国語を学ぶことになるのです。第一級の資料は地道な作業でしか手に入りません。上に挙げた先生は恐らく文献など読む必要はないと考えているのでしょう。

さて、私がネット情報を信用していないのはともかく、ここまで読んで君たちは何か違和感はなかったですか。私は「上に挙げた先生は恐らく文献など読む…」と書いていますが、これは私の推測に過ぎません。この先生が文献など読まなくていいと言ったわけではありません。明らかに私は最悪だった第一印象に引きずられて、この先生に偏見を持ってしまったのです。皆さん、気がついたでしょうか。

一般的に言って、私たちは第一印象がよくないと偏見を持ちやすいのですが、あまりに強く偏見を持ってしまうと「確証バイアス」と呼ばれるものに陥るようです。バイアス (bias) とは先入観とか偏見という意味です。確証バイアスとは、何らかのバイアスを強く持ってしまうと、それ以後はそのバイアスを補強するような情報しか受

けつげなくなるという現象です。自分の正しさを確かめるような情報ばかりを選んで集める、これはよくないことですが、どうも私たちは自己肯定が好きですから、不都合な情報に目をつぶる傾向があるのですね。気をつけたいものです。

都合のよい情報だけを集めて盛り上がることは、例えば血液型の話などでもよく見られます。私はO型（ついでに射手座）ですが、私の言動に大雑把で楽天的な性格を見ると「やっぱりO型ですね」となります。よく言われます。そして、A型の特徴と言われる「きれい好き」な面やB型のマイペースなところも私には十分にあると主張しても無視されることが多いですね。あくまでも私の中にはO型の特徴しかあってほしくないかのように。こんなのは他愛のない例ですが、本当の対人関係で、例えば君たちの友人関係で、最初に「嫌な人」あるいは「悪い人」という印象を持ってしまうと知らず知らずに勝手な証拠固めをしてしまっていないですか。知らず知らずというところが問題です。論理的に考えれば、物事の真実は「反証」なくして明らかにならないからです。その人が悪い人かどうか、それには確証だけではわかりません。反証が必要です。この場合、その人が「いい人だという可能性を完全に否定する」ことが反証です。いかがですか。大変難しそうだし面倒なことだと思いませんか。確証は楽でしょう。どんどん集まりますよね。しかし自分に反証を課すのは骨が折れます。

ですから私たちは第一印象でバイアスをかけないように気をつけることと、知らず知らず確証バイアスに陥っていないかを反省する必要があるのではないのでしょうか。曇りなき目で人を見るというのは、難しいことなのですね。

今朝出勤すると3Bの青木瑠奏さんの素敵なお花が迎えてくれました。ありがとう。

### 今週のおすすめ

・唐沢寿明 『ふたり』 (幻冬舎文庫)

テレビの中の俳優は虚像だとわかっているけど、実生活までそういう人だと思ってしまう人も多いらしい。売れるために「さわやかさ」を演じる俳優は、本当の自分の姿と格闘していくことになる。本名、唐沢潔。広く名を知られるようになったのは、これぞトレンドードラマともいえるべき「愛という名のもとに」でしたかね。ほぼ30年近く前のドラマでした。浜田省吾の主題歌もヒットしたものです。

この本は唐沢さんの自伝です。役者になりたい一心で地元の工業高校を中退するのですが、全く迷いなく辞めています。暴力をふるう父親から母親をかばい、これで父を追い出せると思ったら、母親から「あんたが出ていきなさい」と言われ、「えっ何で？」と驚きながらもそのまま家出してしまいます。新宿でバイト生活をしながら役者になるチャンスを模索する日々は、ちょうど私自身の青春時代と時期が重なるので興味深かったけど、君たちには何の話か分からないこともありそうです。

山口智子さんと結婚して手料理を食べているとき、今まで売れない頃に食べていた食事は「エサ」に過ぎなかったと述懐するところは胸を打ちました。唐沢さんの陰には、夢を見るだけで終わった何人もの唐沢さんがいたことなのでしょう。そのことを念頭に置いて、読んでみて下さい。

BGMはBENIの「歌うたいのバラッド」でした…。